

遊離「全称」数量詞について

有坂 顕二

On Floating "Universal" Quantifiers

Kenji Arisaka

1. はじめに

日本語の遊離数量詞(floating quantifier) ⁽¹⁾の統語的振る舞いに関しては、特に、遊離数量詞と共に解釈されるべき「先行詞」(antecedent)にあたる名詞句との関係や、数量詞自体が文中で解釈されるための認可条件などについて、これまで様々な研究、提案がなされてきた。しかしながらほとんどの場合、研究の焦点は(1)に見られるような数詞(numeral)に当てられ、それと先行詞との構造関係の観察を基にして数量詞遊離の現象全体が論じられてきた感が否めない。

- (1) a. [2人の学生が](昨日)来た。
b. [学生が](昨日) 2人来た。

本稿では、特に(2)に見られるような、「すべて」、「全員」などの「全称数量詞」(universal quantifier)が遊離している場合に焦点を当て、数詞とはその統語的振る舞いが異なることを示すいくつかの言語事実を提示した上で、遊離したように見える全称数量詞が、先行詞からほぼ完全に独立した要素となっており、先行詞とではなく述語(predicate)と関係を結んでいるため、更に言えば、先行詞の代わりに述語(predicate)の項(argument)、つまり主語や目的語として機能しているため、文中での存在が認可されていると主張していく。

- (2) a. [SUBJECT すべての学生が](昨日)来た。
b. [学生が](昨日) すべて来た。
c. 学生が(昨日) [SUBJECT すべて]来た。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、まず数詞の場合と異なり「の句」(属格句)からの全称数量詞遊離が可能であることを例示する。次に定名詞句(definite NP)からの遊離について、全称数量詞と数詞の遊離に差があることを示す。更には全称数量詞遊離が、いわゆる「黒田の一般化」(Kuroda's generalization)に従わないことを示す。3節では、遊離した「すべて」、「全員」などの全称数量詞は、先行詞からはほぼ完全に独立した要素となっていることを、それらと同じ環境に生じることのできる要素の振る舞いをもとに、間接的にはあるが示す。そしてそれらの事実に基づき、4節では遊離した全称数量詞が文中でどのように認可されているのかを考察していく。

2. 遊離した全称数量詞と数詞の差異

2節では、全ての遊離数量詞が統語的に1つの同質のクラスをなすと考えると説明はつかないが、遊離した全称数量詞の統語的振る舞いが、遊離した数詞のそれとは異なっていると考えれば説明のつくよ

うな事実について見ていく。

2.1. 「の句」(属格句)からの遊離

「の句」からの数量詞遊離については、さまざまな文献の中でも容認度が低いとの報告がなされている (Shibatani (1977) 等参照)。例えば(3)のような多重主格構文と、それとほぼ意味的に対応する「の句」を含む文を比較すると、(3)に示す通り「が句」からの数量詞遊離が文法的であるのに対し、(4)に示すように「の句」からの数量詞遊離は非文法的である。

- (3) a. それらの[3人の先生が]奥さんが、若い。
 b. それらの[先生が] 3人奥さんが、若い。 (Shibatani 1977)
- (4) a. それらの[3人の先生の]奥さんが、若い。
 b. * それらの[先生の] 3人奥さんが、若い。
 c. * それらの[先生の]奥さんが、3人若い。 (ibid.)

これらの事実に対し有坂(2001)は、格助詞「の」は、(抽象的)格が具現化した格助詞「が」や「を」とは異なり、機能範疇 D(eterminer:「決定詞」)であって、「の句」は「の」を主要部とする構造を持っていると主張し、したがって「の句」から数量詞遊離ができないのは、(5)のような後置詞「で」を主要部とする「で句」からの数量詞遊離ができないのと同様な説明が与えられるとした。

- (5) a. 学生達は[2台の車で]やって来た。
 b. * 学生達は[車で] 2台やって来た。 (Miyagawa 1989)

しかしながら一方で(6)のような事実も報告されている。(2)

- (6) a. [学生が 3人買った]本
 b. ?? [学生の 3人買った]本
 c. [学生の みんな買った]本 (Kuno 1978)

遊離数量詞は、それが解釈を受けるためには、先行詞の名詞と何らかの関係を持つことで認可されねばならないと考えられているが、(6 b)の容認度は、上で述べたように、先行詞「の句」が「の」を主要部とする構造を持っていると仮定することにより説明可能である。しかし一方(6 c)の文法性を見ると、全称数量詞の遊離は先行詞の助詞の違いなどには左右されないと言うことができよう。

2.2. 定名詞句(definite NP)からの遊離

Homma, Kaga, Miyagawa, Takeda and Takazawa (1991)は、遊離数量詞が先行詞としうる名詞句の特徴として、名詞句に「この」や「それら」など、英語の定冠詞(definite article)に当たるような要素が付いていないことがあげられると述べている。次の例を見てみよう。

- (7) a. 3人の男(たち)がウナギを食べた(こと)。
 b. 男(たち)が 3人ウナギを食べた(こと)。
- (8) a. その 3人の男(たち)がウナギを食べた(こと)。
 b. * その男(たち)が 3人ウナギを食べた(こと)。

(7)では、先行詞である「男(たち)が」には英語の定冠詞に当たるような表現がついていないため、(7 b)

遊離「全称」数量詞について

に見られるとおり数量詞が遊離できているのに対し、(8)では先行詞に「その」のような表現がついているため、(8 b)は容認不可となっている。

一方 Homma, et al. は、同じ論文の付記の中で(9)、(10)のような例を取り上げ、このような「定性効果」(definiteness effect) (3)は、遊離した数量詞が全称数量詞である場合、現れてこないと述べている。

- (9) a. 全ての男(たち)がウナギを食べた(こと)。
 b. 男(たち)が全てウナギを食べた(こと)。
 (10) a. (?) その全ての男(たち)がウナギを食べた(こと)。
 b. その男(たち)が全てウナギを食べた(こと)。

(9)と(10)の例は上にあげた(7)、(8)とほぼ同じで、唯一の違いは、遊離した数量詞が数詞から全称数量詞に変わったことのみであるが、(10b)に見られるように、「その」のついた名詞句からの遊離が可能となっている。このような(8 b)と(10b)の文法性の違いは、数量詞遊離が単一の現象であると考えたと説明はつかないだろう。

2.3.「黒田の一般化」(Kuroda's generalization)

数量詞遊離の研究には長い歴史があり、数量詞とその先行詞の構造関係をとらえるため、これまで様々な接近法が提案されてきた。その1つに、例えば(11a)のような[_{NP}数量詞の名詞] (例: 3人の学生)形が基本にあって、そこから数量詞が移動変形によって名詞句内から「遊離」し、(11b)が生成されるとするアプローチがある。ただしこの主張の問題点の1つに、主語名詞句から遊離した数量詞が(波線の)目的語名詞句を越えてその後ろまで移動した場合、なぜ非文法的になるのかが説明できないということがある。

- (11) a. [3人の学生が] (昨日)その本を買った(こと)。
 b. 学生が(昨日) 3人 その本を買った(こと)。
 c. ?* 学生が(昨日) その本を 3人買った(こと)。

Kuroda(1983)は、(11)のような事実に基づき、(12)のような一般化を出している。

- (12) 「遊離」数量詞と主語名詞句を関係づけることは、目的語の名詞句がその間にある場合、不可能である。

ただこの一般化も、遊離した数詞の振る舞いを基にして導き出されており、(11c)の数詞を全称数量詞に変えた(13)は容認可能である。

- (13) 学生が(昨日) その本を 全員買った(こと)。

ここまで数量詞遊離に係わる3つの現象を見てきたが、そのどれもが、数量詞遊離が単一の現象であると考えたと統一した説明を加えることは不可能であり、遊離した全称数量詞と数詞は異なった存在であるということを明らかに示している。したがって全称数量詞の場合、数詞と同じやり方で、すなわち先行詞によって認可されているとは考えづらい。3節では、遊離したように見える全称数量詞は、基底より先行詞からはほぼ完全に独立した要素となってしまっていることを、それらと同じ環境に生じることのできる「数詞+とも」表現の振る舞いを基に、間接的にはあるが示していく。

3. 遊離全称数量詞の独立性

3節では、一見すると「遊離した」ように見える全称数量詞が、基底より先行詞からはほぼ完全に独立した要素として存在していることを(間接的に)支持する証拠を提示する。

注1や2.3.節でも述べたが、先行詞となる名詞句と数量詞が離れている場合に「遊離」という表現を使う理由は、そのような例と意味的に対応する[_{NP}数量詞の名詞](例:[_{NP}2人の学生])のような表現が存在し、その2文の関係が、あたかも数量詞のみが[_{NP}数量詞の名詞]から「遊離」(=移動)したように見えるからである。同様の対応は、次の(14)のように英語でも観察されている。

- (14) a. [_{NP} All/Both of the students] are happy.
b. [_{NP} The students] are all/both happy.

日本語と比較すると、英語は「遊離」することのできる数量詞は極端に少ないが、all以外にもいくつかあり、その一つにbothがある。日本語でそれに完全に対応する表現はないが、「数詞+とも」がほぼそれに当たると考えてよいであろう。そして日本語の「数詞+とも」も英語同様、(15)に見られるように、遊離した「みんな」や「全て」と同じ環境に生じることができる。

- (15) a. [学生の2人も買った]本 (cf. (6 c))
b. その男(たち)が3人もウナギを食べた(こと)。 (cf. (10b))
c. 学生が(昨日)その本を4人も買った(こと)。 (cf. (13))

一方、(15)の下線部「数詞+とも」から「とも」を取り去るとすべて容認度が下がるのは、2節で見たとおりである。

- (16) a. ??[学生の3人買った]本 (= (6 b))
b. * その男(たち)が3人ウナギを食べた(こと)。 (= (8 b))
c. ?* 学生が(昨日)その本を3人買った(こと)。 (= (11c))

そしてこれも2節で例示したことだが、(16)の「[_{NP}名詞]…数詞」形の表現は、「[_{NP}数詞の名詞]」の形へ書きかえると容認可能となる。

- (17) a. [3人の学生の買った]本 (= (6 a))
b. その3人の男(たち)がウナギを食べた(こと)。 (= (8 a))
c. 3人の学生が(昨日)その本を買った(こと)。 (= (11a))

ここで注目すべきことは、(15)の「数詞+とも」表現を先行詞と考えられる名詞句の直前の位置に置き、(17)のように[_{NP}数量詞の名詞]の形を作ってみると、(18)に見られるように全て容認不可になる。

- (18) a. *[2人とも学生の買った]本
b. * その3人とも男(たち)がウナギを食べた(こと)。
c. * 4人とも学生が(昨日)その本を買った(こと)。

意味的に対応するような「[_{NP}数量詞の名詞]」形の表現と「[_{NP}名詞]…数量詞」形の表現の二つが存在し、少なくとも前者が文法的であるならば、後者は前者から数量詞が「遊離」したものであると言うこともできようが、「数詞+とも」表現が含まれる文の場合、「[_{NP}数量詞の名詞]」の形は容認不可であり、したがって「数詞+とも」は(16)では先行詞から「遊離」しているとは言えず、先行詞と考えられる名詞句からは

遊離「全称」数量詞について

ほぼ完全に独立した要素となっていると考えられる。

このような考え方を更に押し進め、「数詞＋とも」表現と同じ環境に生じ同じ容認性を示す全称数量詞「みんな」や「全て」もまた、(10a)が多少不自然に響くことから、基底の段階から(そしてそれ以降も)完全に独立した要素であると主張することも可能であろう。(4)

では遊離した全称数量詞が数詞と全く異なっているとすれば、それが文中で解釈を受けるためには、文中でどのように、また何によって認可されているのであろうか。2節、3節で示した事実に基づき、次節で考察していく。

4. 全称数量詞の認可について

本稿の理論的基礎となっている「ミニマリスト・プログラム」と呼ばれる言語理論では、文中のあらゆる要素は、それが解釈されるためには、意味内容を持ち、なおかつ他の要素と何らかの係わりを持たねばならず(その場合、それに関係する要素はどちらも「認可」されることになる)、統語部門で認可されない要素は、LFと呼ばれる統語部門と意味部門のインタフェイス表示までに(またはその時点で)、削除されると仮定している(詳しくは Chomsky(1995)等参照)。

1節でも述べたが、生成文法では、遊離した数量詞はそれと共に解釈されるべき先行詞と、ある一定の構造関係が満たされていれば認可されるとこれまで仮定されてきた。しかし2節、3節で見てきたように、先行詞から離れて存在する「数詞＋とも」や「みんな」、「全て」が先行詞から完全に独立した要素となっているという主張を直接的、間接的に支持する証拠があり、とすれば、独立した全称数量詞が文中で解釈されるためには、何らか別の要素によって認可されていると仮定せざるを得ない。

本稿では、遊離したように見える全称数量詞は、先行詞の名詞句とほぼ同じ意味内容を持っており、それが生じている節の述語(predicate)から見てより近い位置に生じているため、述語が全称数量詞を先行詞の代わりに「項」(argument)としてとらえることが可能となり、そのため節中での存在が認可されていると提案する。つまり、例えば(19)の「数詞＋とも」や「みんな」、「全員」は、それぞれ(19a)では「買った」、(19b)では「食べた」、(19c)では「買った」の項、別の言い方をすれば主語として機能しているのだとする。

- (19) a. [学生の 2人とも/みんな/全員買った]本
 b. その男(たち)が 3人とも/すべて/全員ウナギを食べた(こと)。
 c. 学生が(昨日)その本を 4人とも/すべて/全員買った(こと)。

「数詞＋とも」や「みんな」、「全員」が独立した要素であるならば、ではどのようにして先行詞との同一指示(coreference)や一致(agreement)、すなわち例えば先行詞が「物」の場合、「全員」、「2人とも」ではなく「全て」や「2つとも」が用いられるなどが可能となるのであろうか。ここでは(20)のように、全称数量詞はその内部に空範疇 pro を含んでおり、それが先行詞によって束縛(bind)されるためであると仮定する。

- (20) [学生が_i]...[2人とも/すべて/全員 pro_i]...

ここで問題となってくるのが、全称数量詞が項として機能している際の先行詞の文中の役割であるが、本稿では、その場合には「主題」(topic)や、Kuroda(1978)の提案する「大主語」(major subject)となっていると主張する。次の例を見てみる。

- (21) a. 魚は鯛が美味しい。(久野 1973)
 b. オランダの魚がニシンがよい。(Kuroda 1986)

(21a)の「魚は」句が主題であり、(21b)の「オランダの魚が」句が大主語である。この主題や大主語が、それが含まれる節の残りの部分に出所がなく、独立した存在となっていることは、例えば(21a)で「美味しい」のは「鯛」であって、「魚は」はその文の話題の枠を提示する役目のみ果たしていることから、また(21b)で「よい」のは「ニシン」であって「オランダの魚」ではないことから明らかである。また3節の(18)(=23)同様、[主題/大主語の主語]という形にしてみると、その容認性が下がることからも分かる。

- (22) a. ?*[魚の鯛が]美味しい。
b. ?*[オランダの魚のニシンが]よい。

- (23(=18)) a. *[[2人ともの学生の]買った]本
b. *[[その3人ともの男(たち)が]ウナギを食べた(こと)。
c. *[[4人ともの学生が] (昨日)その本を買った(こと)。

日本語がこのような節中のどこにも出所を持たない名詞句の存在を文中に許す言語であることを考慮に入れると、全称数量詞が独立して存在し、その節内で先行詞より述語の近くにある場合、数量詞の方が項として機能し、一方本来なら項と考えられる先行詞は、上で見たような「主題」や「大主語」と同様な存在になってしまっていると主張できよう。ではそのような場合、先行詞はどのようにして節内で認可されるのかという点に関しては、(20)で仮定した、数量詞の内部の空範疇を束縛する束縛子(binder)となっているためであると仮定する。

では逆に、先行詞の方が全称数量詞より述語に近い場合はどのようなことになるのであろうか。当然先行詞が述語の項としての機能を果たすことになり、そうなるとそのような文では数量詞が節内で認可されず容認不可になる可能性があるが、全ての例がそうなるわけではない。

- (24) a. 花子が本を全て買った(こと)。
b. ?* 全て花子が本を買った(こと)。 (Kawashima 1997: from Terada 1990)
c. 花子が全て本を買った(こと)。

(24b)に見られるように、目的語を先行詞に持つ「全て」を主語を越えて文頭に(長距離)移動させることはできないことが報告されている。しかし一方(24c)は容認可能であり、したがって(24c)では数量詞は何らかの方法で認可されているということになる。

ここでまず問題となるのが、全称数量詞は移動可能な要素かどうかという点である。数詞に関しては、文頭に移動させることができる場合とできない場合があることが知られている。(5)

- (25) a. 2冊花子が本を買った(こと)。
b. ?* 2人太郎が子供を怒鳴った(こと)。(Miyagawa 1989)

(24b)と(25a)の差異も、2節で見てきたような全称数量詞と数詞はその統語的振る舞いが異なることを示す1つの証拠ともなるが、(24b)の文法性を説明するためには、(25b)の文法性に対するMiyagawaの説明が参考となろう。つまり、(25b)の数詞「2人」は移動したのではなく、基底よりその位置にあり、その後もその位置から移動しないため、先行詞と考えられる要素と関係が結ばず容認不可になるとMiyagawaは議論している(注5参照)。

基本的に、名詞を修飾するような要素はそれを名詞から(遠く)離して置くことはできない。次の(26)と(27)は、それぞれ形容詞、副詞の「まさに」「まさしく」が前置された例であるが、どちらも結びつくことと想定される名詞句と結びつけて解釈することはできない。

遊離「全称」数量詞について

- (26) a. (昨日)太郎が白い花を買った(こと)。
 b. * 白い(昨日)太郎が花を買った(こと)。
- (27) a. (昨日)次郎がまさに/まさしくその花を買った(こと)。
 b. ?* まさに/まさしく(昨日)次郎がその花を買った(こと)。

遊離数量詞は副詞や修飾語だとする主張(Hasegawa(1993)等参照)があることを考慮に入れると、少なくとも独立して存在する全称数量詞は、基底の段階より発音された位置にあり、その後もその位置からは移動しないと考えてよいであろう。したがって、(24b)では全称数量詞は述語の項として捕らえることができず、節中で認可されないため容認不可となっていると説明できる。

では(24c)はなぜ容認可能となっているのかという問題についてであるが、まず(28)のような例を見よう。

- (28) 太郎が、2人子供を怒鳴った(こと)。

(28)は、(25b)で文頭にある数詞を先行詞の近く(VP内)に置いたものだが、この文は当然容認可能になっている。この場合と同様、(24b)が容認可能なのも先行詞と関係を持つという選択肢が使えるようになったためであると考えられる。

5. おわりに

本稿では、様々な言語事実を考察した上で、以下のような提案を行ってきた。つまり、数詞とは異なり、(29a)のように独立した全称数量詞が先行詞より述語に近い場合、全称数量詞は「項」、先行詞は「主題」または「大主語」として機能し、他方(29b)のように先行詞が全称数量詞より述語に近い場合、先行詞は項として機能し、全称数量詞は遊離数詞と同様な存在となる、というものである。

- (29) a. 学生が(昨日)[SUBJECT 全員]、あのプールで泳いだ。
 b. 全員(昨日)[SUBJECT 学生が]、あのプールで泳いだ。

最後にここで、そもそもなぜ、全称数量詞が先行詞より述語に近い場合、全称数量詞が「項」として解釈されることが可能なのかという問題について多少触れておかなければならないだろう。まずその理由として考えられるのが、上で述べた、節中のどこにも出所を持たない「主題」や「大主語」といった要素を容認するという日本語の特徴である。そして2つ目の理由として、「かき混ぜ」(Scrambling)と呼ばれる現象を許すという特徴が挙げられよう。(30a,b)に見られるように日本語は比較的語順の自由な言語であり、その特徴をとらえるため、(30c)に示したように、「を句」はその典型的に現れる位置(θ 位置)から文頭(非 θ 位置)へ、「かき混ぜ」規則という(可視的)移動規則によって前置されたとする提案がなされ、支持されてきた(Saito(1985)等参照)。

- (30) a. 太郎が[そこにあった本を]買った(こと)。
 b. [そこにあった本を]太郎が買った(こと)。
 c. [そこにあった本を]_i太郎が_i買った(こと)。

それに対し Boskovic and Takahashi(1998)は、ミニマリスト・プログラムの枠組みの中で、「を句」は基底段階では文頭の非 θ 位置に生成され、LFまでに θ 位置(=(30c)の_iの位置)へ非可視的移動(Covert Movement)しているという、従来とは逆の提案をしている。

もしこの議論が正しいとすれば、(30b)の「を句」の目的語としての立場はLFまで特定されず、そ

れまではいわば付加詞(adjunct)と同じ扱いとなっていると言え、更には、典型的位置にない場合、日本語という言語には文中にLFまでその立場が決まらない要素があり得るということにもなろう。とすれば、ある場合には全称数量詞が、ある場合には先行詞が、「項」として機能するという本稿の主張も根拠がないわけではないことになる。ただ Boskovic and Takahashi の提案にも疑問の余地があり、この問題については今後の研究課題としたい。

注

(1) 本稿では「遊離」(float)という用語を用いているが、これはこの現象を考察する際の慣例にしたがったものであり、必ずしも、後に述べるような、数量詞が先行詞にあたる名詞句から移動変形(Movement Transformation)によって(可視的に)遊離したと主張するものではない。

(2) (6 c)の容認性については判断が別れており、Kuno(1978)やWatanabe(1994)などは容認可能としているのに対し、Shibatani(1977)は「の句」からの遊離は一律に容認不可としている。本稿では、少なくとも(6 b)と(6 c)の間には差があり、(6 c)の方がずっと容認性が高いとして扱う。

(3) 元々「定性効果」(definiteness effect)は、英語の存在文(existential sentences)のbe動詞の後ろに生じることのできる名詞句に一定の制限があることを述べたものである。次の例を見てみよう。

- (i) a. There are books/some books/many books on the desk.
b. *There's the book/some of the books/every book/"Alice in wonderland" on the desk.

(ib)に見られるように、定冠詞のついた名詞句や全称数量詞の付いた名詞句、そして固有名詞などはbe動詞の後ろの意味上の主語の位置に生じることとはできない。詳しくはMilsark(1974)等参照。

(4) (10a)と(10b)の対応と同様に、「[NP名詞]…数量詞」形を含む(6 c)や(13)を「[NP数量詞の名詞]」形の変態に変えてやると、次に見るように、総じて(多少)不自然な文になる。

- (i) a. ?*本文中の[みんなの学生の買った]本 (cf.(6 c))
b. (?)本文中の全員の学生が(昨日)その本を買った(こと)。 (cf.(13))

このような事実は、(18)の容認(不可能)性と考え合わせると、遊離したように見える全称数量詞は、基底の段階からそしてそれ以降も先行詞から完全に独立した要素になっているとの議論に、更なる支持を与えてくれるであろう。

(5) Miyagawa(1989)は、(25a)と(25b)とでは、(i)に見られるようにそれぞれに含まれる動詞を使って「～てある」構文を作るとその文法性に差がでることから、遊離数量詞が移動した場合、(25a)のような動詞を含む文では、先行詞である目的語の近くに移動の痕跡(trace)を残すことができるため容認可能になるのに対し、(25b)のような動詞を含む文では、痕跡を残すことができないため遠くにある先行詞と関係が持たず容認不可になると説明した。

- (i) a. 本が買ってある。
b. *子供が怒鳴ってある。 (Miyagawa 1989)

参考文献

- 有坂 顕二 2001 「日本語の遊離数量詞と「の句」について」『小山工業高等専門学校研究紀要』第33号 25-34.
- Boskovic, Z. and D. Takahashi 1998 Scrambling and last resort. *Linguistic Inquiry* 29, 347-366.
- Chomsky, N. 1995 *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hasegawa, N. 1993 Floating quantifier and bare NP expressions. In *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, 115-145. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Homma, S., N. Kaga, K. Miyagawa, K. Takeda and K. Takazawa 1991 Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese. *Proceedings of the 5th Summer Conference of TLF*, 15-28.
- Kawashima 1997 The structure of extended nominal phrases: The scrambling of numerals, approximate numerals, and quantifiers in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 1-26.
- 久野 暉 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
- Kuno, S. 1978. Theoretical perspective on Japanese linguistics. In *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 213-285. Tokyo: Kaitakusha.
- Kuroda, S.-Y. 1983 What can Japanese say about government and binding? *Proceedings of WCCFL* 2, 153-164. Stanford, Calif.: SLA.
- Kuroda, S.-Y. 1986 Movement of noun phrases in Japanese. In *Issues in Japanese Linguistics*, 229-271. Dordrecht: Foris.
- Milsark, G. 1974 *Existential Sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Miyagawa, S. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Saito, M. 1985 *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Shibatani, M. 1977. Grammatical relations and surface case. *Language* 53, 789-809.
- Terada, M. 1990 *Incorporation and Argument Structure in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Watanabe, A. 1994 A crosslinguistic perspective on Japanese nominative-genitive conversion and its implications for Japanese syntax. In *Current Topics in English and Japanese*, 341-369. Tokyo: Hituzi Syobo.

〔受理年月日 2003年9月30日〕

